

# 文化資源としての方言

## 東北地方の方言に関する活動をめぐる、資源化の過程における主体の問題

06h2093 増田奈穂

近年、方言が地方独特のことばとして、観光やメディアなど多方面で利用されはじめている。かつては「使うことが恥ずかしい田舎のことば」であった方言は、今では「その土地の雰囲気を感じることでできることば」として、様々な場面で活躍している。

では、このような方言に関する活動は誰が何を目的とし、誰に向けて行っているのだろうか。本研究は東北地方における方言の利用や方言に関わる活動から、文化が資源化される過程にある、資源化の主体の問題について考察していくものである。

内堀基光（2007）は、「資源を考えることは人間社会の基本を考えることにつながる」と述べ、資源は「もの」と人、そして人と人の関係を媒介するものなのであると主張する。そして文化の資源化とは、山下晋司（2007）によると、文化が「ある条件下において、ある目的にとって、ある機能もしくは効能を持つ」ことによって成り立つものである。その過程には様々な主体があり、誰が、誰の文化を、誰を標的として資源化しているのかということの問題にすることができるといふ。資源と文化をめぐるといふような議論を踏まえて、方言の資源化について考えるならば、誰かがある目的で、方言に機能や効能を持たせ、誰かを標的として資源化しているといふことができる。

このことを前提として、以下、東北地方の方言に関する活動とその分析を紹介しながら、方言を資源化する過程における主体の問題の考察を述べていく。

### 1. 記事の分析

本研究では、書籍『東北ことば』（読売新聞地方部 2002）に掲載された東北地方の方言に関する活動について書かれた記事 34 件（表 1）を対象とし、地域や時代背景を考慮しながらその分析を行った。

分析をするにあたり、まず森山工（2007）が文化の資源化について「誰が、誰の文化を、誰の文化として、誰をターゲットに資源化するのか」という問いを立てることができるとした、「誰」をめぐるといふ四重の問いの機制」に沿って各記事を解釈した。本研究ではそのうち、方言に関する活動を行っている個人や団体（誰が）と、その活動の標的（誰をターゲットに）に注目している。

「誰が」に該当するものが資源化の「主体」であり、「誰をターゲットに」に該当するものが資源化を志向された「受け手」である。「主体」は方言に「利用することができる」、「残さねばならない」などといった思いを持ち、活動を行う。そして「受け手」は、活動に関わり方言を受け取ることで、方言への思いを見出す。本研究ではこの思いを記事中の方言へ

の評価や方言に対する表現から読み取り、「主体」および「受け手」による方言への価値づけとした。

表1 『東北ことば』に掲載された記事のタイトル（記事番号は掲載順）

	記事タイトル
1	ネットで開けた“隠語” 共通語介さず世界へ発信
2	夫の遺志継ぎ“お宝”採集 方言集続編の出版目指す
3	“秋田方言集”がベストセラー 隠された“自信”再確認
4	方言ソングで社会風刺 社会人バンド、農家を“代弁”
5	教壇から仙台弁伝承 休日は民話語りの独演
6	祖父から聞いた民話 小学生が「語り」で受け継ぐ
7	盛岡弁で優しくなれた 小学生ら総合学習で“成果”
8	若い弟子に意を強く 小五二人が昔話発表会
9	「マザーグース」が秋田弁に よみがえる田舎の雰囲気
10	FMで楽しく庄内弁講座 二〇代の目線で底辺拡大
11	DVDで伝える仙台弁 身振りも生き生き後世に
12	旅人もてなす会津弁 “いやしの間”で触れ合い
13	公共施設に“土着”の名 響きは外国語？温かみも
14	八戸の人々の誇りに 劇団挙げ南部弁で劇上演
15	高校生が作る民話集 文化祭の名物、一〇巻目
16	山形弁の短歌集出版 調理場で作品を書き留める
17	魂宿る“東北版マクベス” 言葉の壁越え、英国でも好評
18	ラップに福島弁乗せ 英語よりも「かっこいい」
19	若者も持ち味に愛着 ゼミ生の半分卒論の題材に
20	微妙な差異に戸惑い 外国人花嫁の秋田弁修業
21	村山弁も料理の一つ めくもり評判の農家民宿
22	津軽弁への哀惜込めた一冊 若い人へ託す「死語辞典」
23	笑い軽妙「東方落語」 発足四周年、公演五〇回超す
24	愛情高じて「ピーマン音頭」 「土から生まれた言葉」で会話
25	語り部すそ野広がる 「心の土産」願って教室開催
26	多彩な仲間で“建国” 首相、閣議、国旗……津軽弁を後世に
27	ネットの情報福島弁で 語りは「もんべのアヤちゃん」
28	にぎやか「井戸端ゼミ」 秋田弁学ぶ県外出身者
29	「愛着ある」方言は永遠 場面で共通語と使い分け
30	若者に広まる新方言 共通語にはない連帯意識
31	共通語は自己表現の“武器” 秋田・西成瀬小一〇〇年続いた発音練習会
32	テレビ番組に次々“進出” タブー視転換、人気も上々
33	共通語と共生進む教室 世代間のミゾ埋める効果も
34	生き続ける庶民の言葉 日本語豊かにする一助に

## 2. 方言に対する価値の見直し・変化

佐藤和之(1999)によると、日本が国全体として自国の文化を見直すようになったのは、1970年代からのことである。それ以前は、方言は「共通語よりも劣ったもの」で、使うことは恥ずかしいことだという認識が一般的であった。しかしその後、日本文化の魅力を再発見しようとする国の動きの中で方言もその価値を見直され、その認識は教育やマスコミの手も加わって徐々に変化してきた。

分析対象の記事からも方言を資源化する主体及び資源化を目がけられる標的となっている人々が、様々な契機により方言に対してその価値の見直しをしたり、新たな価値を生み

出したりしているような表現が見られる。

### (1) 価値の見直し

主体が方言の価値を見直したことで自らの活動に繋がったという経緯が、記事中から読み取れるものがあった。次に紹介する記事 5、18、28 は、それが最も顕著であったものである。

#### 記事 5：教壇から仙台弁伝承 休日は民話語りの独演

渡辺裕子教諭 (49) が中学校で行っている「仙台弁授業」は、方言を取り上げる授業の走りだった。

教師になる前は地元のミヤギテレビでアナウンサーをしており、上司から「地元の言葉でやってみないか」と持ちかけられたことがあった。「初めは本意でしたよ。でも自然体で、心のひだにくっついた思いを簡単に伝えられるんだなって、取材する先々で実感して変わっていったんですね」と語る。それまでは方言を恥ずかしいと否定し、アナウンサーを目指したのも「方言を抜き去りたい」という思いからだった。しかし高校卒業まではおばあちゃんっ子で、どっぷり方言につかかって育っていた。

今は「私らが方言を伝えることのできる最後の世代」と、使命感にも似た思いをもつ。「古いものは残したい。でも懐かしむだけじゃ残らない。生活に根付かせていかないと」と渡辺さんは語る。

民話語りを通じて仙台弁の伝承を行っている渡辺さんは、都内の女子大に通っていた頃は方言を恥ずかしいと否定し、方言を抜き去るためにアナウンサーを目指した。しかしアナウンサーになってから地元の言葉で番組に出る機会があり、それを通じて仙台弁で話す「心のひだにくっついた思いを簡単に伝えられる」ことに気付いた。さらには「私らが方言を伝えることのできる最後の世代」と使命感に似た思いを持つまでになる。

#### 記事 18：ラップに福島弁乗せ 英語よりも「かつこいい」

福島県で行われる「福島わらじまつり」の二日目、若者らがヒップホップのリズムに福島弁と英語の早口の語りを乗せたラップ「ダンシングソーだないと」で踊り歩く。

祭りのテーマ曲を手がけた福島市出身の音楽家明石隼汰さん (36) は「福島弁のラップを入れたら優しさや温かみが伝わるのではないかと、福島弁独特の語尾で韻を踏み、平板なイントネーションはそのままにしたが、これが当たった。明石さん自身は高校卒業後に故郷を離れて以来方言を「田舎くさくて恥ずかしい」と封印していたが、福島弁ラップを通して故郷に思いをはせ、音楽仲間から「方言でラップができるなんてすごい」と驚かれ、「方言は個性、財産だ」と思った。新しい祭りの新しい試みに、自分達の言葉が核になったことはうれしい。

祭りのテーマソングとして福島弁のラップを作った明石さんは、高校卒業後に故郷を離

れて以来、方言を「田舎くさくて恥ずかしい」と封印していた。だが祭りのテーマソングの制作を依頼された際に、福島弁を利用することで温かみや優しさを表現できるのではと考え、それが故郷に思いをはせることにつながった。さらに音楽仲間に「すごい」と絶賛されたことで、「方言は個性、財産だ」と考えを改めることとなった。

記事 28：にぎやか「井戸端ゼミ」 秋田弁学ぶ県外出身者

「井戸端ゼミナール」は秋田県外出身の女性が秋田の文化や風土を学び、楽しもうという集まりだ。出身地は北海道から沖縄まで様々で、顔を合わせると秋田弁が頻繁に話題にのぼる。「県外から秋田に来て最初に感じるのが言葉の壁ですからね」と代表の高杉静子さん(49)は言う。高杉さんは千葉県生まれで、25年前に秋田に嫁いで来たが、当初は「早口で発音も不鮮明」な秋田弁に戸惑う毎日だった。秋田弁を見直すきっかけとなったのは子育ても一服した1993年。県外出身者に秋田について知ってもらおうと、県生活センターが主催した「井戸端ゼミナール」を受講した時、秋田弁が日本の古い言葉に由来していて、みやびな雰囲気も漂わせていることに興味を湧いたことから、外国語さながらに耳慣れない厄介な言葉だった秋田弁が、が然面白く感じられるようになった。翌年ゼミナールが閉講した後も「秋田の言葉や人、文化のよさを、県外出身者にもっと紹介していきたい」と自らが代表となって「井戸端ゼミナール」の名称と活動を引き継いだ。今は「秋田弁を使うと、人柄の温かさがにじみ出る。言葉は人を引きつける大きな力となる。秋田弁をもっと多くの人に知ってもらいたい」と考えている。

「井戸端ゼミナール」の代表をつとめる高杉さんは、秋田県に嫁いで来た頃は「早口で発音も不鮮明」な秋田弁がわからず、とても苦勞した経験を持つ。しかし県生活センターが主催した「井戸端ゼミナール」に参加することで、秋田弁のみやびな雰囲気を知り、その面白さを自ら発信したいと考えた。高杉さんは資源化の「受け手」側に立って方言に価値を見出したことから、それを自らの活動へと繋げたといえる。

このように、方言の価値が見直されることで新たな資源化の「主体」が生まれることもある。方言を資源化する「主体」のバリエーションは、その価値の見直しによって広がっていくと考えられる。

## (2) 「意外な受け手」による価値の創出と、地元への「ことばの再帰」

近年インターネットなどのメディアの普及により、方言に関わる活動はさらに広がりつつある。そのことによって、主体にとって「意外な受け手」に方言と活動が届き、ことばに新たな価値が生みだされていることを記事から読み取ることができた。

次に紹介する記事では、岩手県の施設の名称を一般公募したことによって「意外な受け手」が現れ、さらにそのことが地域の人々が失われかけていた方言の価値を見直すことにも繋がっている。

### 記事 13：公共施設に“土着”の名 響きは外国語？温かみも

「プラザおでって」、「なはんプラザ」、「おらほーる」といった、近年岩手県内に登場した公共施設の名はどれも響きが柔らかく親しみやすい。そして、外国語のしゃれた名前にはないあったかい雰囲気がある。

「親しみを込めて呼べる名前を」つけるという趣旨で、一般公募により決定した「プラザおでって」は、圧倒的な支持を得て選考されたものだ。名称の発案者堀淵伸治さん（46）は徳島県出身で、岩手県とは縁もゆかりもなかったが、たまたま盛岡市の友人との雑談で「おでって」という言葉を耳にし、「外国語のように聞こえて新鮮」と感じ応募してみたのだという。施設を管理する市観光文化交流センター副館長は「この街にしかない言葉だからこそ、自分達の施設という意識が生まれる」とネーミングに胸を張る。「おでって」という言葉は今や普段の生活ではほとんど使われないが、「方言には『ぼくらは確かにこの町に生まれ育ったんだ』という、原風景みたいなものを感じさせてくれる力がある」と副館長は語る。

「おでって」ということばは、盛岡では「今や普段の生活ではほとんど使われない」。だがそれを耳にした岩手県とは縁のなかった堀淵さんが、「外国語のように聞こえて新鮮」と施設の名称に応募した。それを選考した盛岡の人々は、普段は使わないことばに「原風景みたいなものを感じ」、「親しみを込めて呼べる」と思ったのである。この記事 13 は、方言を受け取ってそこに新たな価値を見出した「受け手」が、今度は「主体」となって地元のことばをかえしているものであるといえる。

このように「主体」の意図から離れた「受け手」に方言が伝わって新たな価値を見出され、さらにその「受け手」が「主体」となって方言を発信したことで、地域の人々が自分たちの使っていた方言の価値を見直したり発見したりするという現象が起こっている。方言の資源化の「主体」が県内と県外などというように複数存在することによって、互いにその価値を見出し合い、失われかけていたことばが再び地域に根付いているのである。

### 3. まとめと考察

方言を資源化する活動は、いずれも「主体」が方言に対し価値を見出しており、その価値に基づいて行われている。そして方言に対する価値は、方言の資源化の根底にあるものであると考えられる。本研究では、「主体」と「受け手」の両方において、方言に対する価値が経験や活動を通して変容したり、新たに見出されたりすることが明らかになった。

「主体」によって資源化された方言は、「受け手」に届くことによりその価値を確認され、また新たな価値を見出される。「主体」の持つ方言の価値は、「主体」の経験によって変容したり、新たに見出されたりしている。さらに「主体」が行う活動によって、その「受け手」は自分で方言への価値を見出したり、生み出したりする。また、インターネットの普

及などといったメディアの変化によって、方言と活動は「主体」にとって「意外な受け手」へも広がりつつある。その結果、「意外な受け手」がさらに「主体」となって発信した情報により、地域の人々が自分たちの使っていた、あるいはほとんど使われなくなったような方言の価値をも見直したり発見したりする現象が起こっている。本論では、このような現象を「ことばの再帰」と呼ぶ。

方言はこうして人から人へと伝わっていくことで、価値づけをされていくのである。ことばを資源化する「主体」が複数存在し、「受け手」が多様になっていることで、方言などのことばは残されたり広まっていったりするだけではなく、「ことばの再帰」によって地域に再び根付くこともありうると思える。

<参考・引用文献>

- 内堀基光「序——資源をめぐる問題群の構成」 内堀基光編『資源と人間』弘文社 2007
- 大野眞男「学校教育と標準語・共通語・方言」  
佐藤和之・米田正人編著『どうなる日本のことば——方言と共通語のゆくえ』  
大修館書店 1999
- 尾崎喜光「第2章 言語生活の中の方言」  
徳川宗賢・真田信治編『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社 1991
- 金沢裕之「第6章 言語意識と方言」  
徳川宗賢・真田信治編『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社 1991
- 佐藤和之「序 20世紀の方言論」  
佐藤和之・米田正人編著『どうなる日本のことば——方言と共通語のゆくえ』  
大修館書店 1999
- 日高貢一郎「マスコミにおける方言の実態」  
飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学1 一方言概説一』  
国書刊行会 1986
- 森山工「文化資源使用法——植民地マダガスカルにおける「文化」の「資源化」」  
山下晋司編『資源化する文化』弘文社 2007
- 山下晋司「序——資源化する文化」  
山下晋司編『資源化する文化』弘文社 2007
- 山下晋司「文化という資源」  
内堀基光編『資源と人間』弘文社 2007
- 読売新聞地方部『東北ことば』 中央公論新社 2002